**№40　テーマ『人間として本物とは何か』**

**講話日2015年8月7日**

**皆さんこんにちは。口にするのもあれですが、毎日猛暑で大変な中、お仕事ご苦労さまです。特に現場で仕事をしていただいている方々の苦痛はいかほどなものか、心配になるほど大変な暑さです。今日のテーマは『人間として本物とは何か』。堅苦しいテーマなんですけど、仕事をしていく上でお客様との関係を考えると、お客様は常に本物を求める。そういう厳しい目で仕事をしている方々に注目しているということが実際に感じられます。プロとして仕事をしていく上での心構えとして、本物を感じさせるというのは非常に大事なものとなっています。ついつい「あいつは偽物だ」と相手に受け止められてしまうと、信用をなくしてしまいますし、自分以外にも会社の信用・信頼までなくすことに結びついてしまう…そうなると非常に問題です。全社員が心をひとつにして、本物の人間として生きる・本物の仕事の仕方をすることを常に心していなければならないと思います。**

**人間には本物と偽物があるというのは、日常でも苦手なもの、心無い言動、人でなし、傲慢な態度など、そういう人に「あいつは偽物だ」という評価をすることがあります。また、人に驕れるような態度を取ったり、媚びへつらう態度、生き方を示してしまうこともよくあって、そんな時にも「あいつは偽物だ」と言うことがあります。偽物というのは、人間の格を感じられない時に“偽物”という言い方をするんじゃないかなと思うんです。やっぱり人間というのは、人の道を外れてはならない・人間らしい生き方を見失ってはならないということが基本的にあって、一般的に言って人間らしいというイメージに合わないと「あいつは偽物だ」と言われることがあると思います。常識的に言って偽物と言われるような生き方を、プロとして仕事をする人間は決してしてはならない。それがある意味で命取りになる。また、後ろ指を指されるようなことになってしまって、自分たちの信用を失う…。そういう意味で、人間としての格のある生き方とはどういうものなのか、どういうことに気を付けていなければならないのか。そういうことを常に考えていないといけない。**

**人間には本物と偽物の区別があるということをもう少し学問的な根拠から申し上げます。人間は人間独特の命の形を持っています。他の動植物とは違う、人間独特の命の形を持つ。形というのは、どうしてこの形になったのかというと、命の中にある内容…つまり能力、機能などが内面にあって、これらが元になって形を決めることになる。「形は内容の表現である」という言い方をするんですが、機械なんかでもその機械に新しい機能が付け加えられると、その機械の形は変わります。だから、形を見ればその機械の能力や機能が備わっているかが分かる。内容が変われば形が変わる、形が変われば内容が変わる…そういう関係性があるわけであります。人間が他の動植物と違う独特の形を持っているということは、一体この形はどういう内容を表現しているのだろうかということを考えなくてはなりません。そして、この命に相応しい内容を持っていれば本物だ、ということになりますし、命に相応しくない内容を持っていればニセ物ということになってくるわけですよね。**

**命の形というのは明らかに自分でつくったものではなくて、母なる宇宙の摂理の力によってつくり出された命の形を我々は与えられて生きているということです。我々の命の形には、命の形をつくった母なる宇宙の思い・願い・祈りが込められていると考えなくてはなりません。確実に命の形をつくったのは宇宙の摂理の力なんですよね。それにはいろいろな命の力があって、植物もあるし、動物もある。人間というのは独特の命の形、他の動物とは違う形を持っている。であるがゆえに命の形には命をつくった母なる宇宙の意志・思い・願いというものが込められていると考えなければなりません。我々は人間として人間らしく正しく生きるということは、結果としては自分の命の中に込められた母なる宇宙の思い・願い・祈りを受け止めて、応える生き方をする…それが人間として正しく生きる、本物の人間として生きるという道だと言えます。ですから、我々は人間の命の形にはいかなる母なる宇宙の思いが込められているのかということを考えて、思いを実現するような・応えるような生き方を目指していかなければならない。そのことによって人間として本物の生き方を実現することができるんだと言うことができます。これらが大事な原理だと考えられます。**

**では、一体この人間の命の形には、いかなる思い・願い・祈りが込められているのか。このことを考えていかなければなりません。我々は人間として生まれてきたと言いますけど、動物学上の分類における人類として生まれるのであって、生まれた瞬間は人格はありません。成長過程において格を獲得して、人間社会において生き方を教えられていき、人間に成る。これが人間の人生の道筋であります。ですから、成人と言われるわけですね。成人式を迎える年代になれば、人間としての在り方を備えていなければ成人=人間に成ったと言えない。そういう意味でも大人に成る前に大人に成るというのはどういうことなのか。人間の格を持つというのはどういうことなのか。どうなれば人間に成るということなのか。そういうことに関するしっかりとした見識を持って生きないと、人間らしい人間に成る…いわゆる母なる宇宙の期待に応える人間に成長することができない。ただ無自覚になんとなく勉強をしてきていたら、人間に成れるということでは、人間としての生き方においてはある意味では本物性を欠いた、偽物の人間になってしまう恐れがある。**

**人間というのは目覚めたる命・宇宙と言われます。人間が本当に人間として生きていくためには命とはなんなのか、宇宙とはなんなのか、そういうことをちゃんと考えて、わかって、知識・自覚を持って生きていかないと人間らしく生きることはできません。目覚めたる命というのはなんなのか。人間という命の中には、どういう内容、あるいは能力、機能というものが込められているのかを知って、自己実現の生き方をする。そこに人間としての本物の生き方が生まれてきます。**

**人間として本物とはなんなのかという問いを持って生きることが大事ですし、人間に成るとはどう在ることなのか、人間に成るとはどう成ることなのか、という問いかけを持ちながら答えを模索し、求めつづけていける…そこに人間としての誠実な生き方がつくられてきて、結果としてそういう生き方をすることによって、我々は本物の人間としての在り方を見失わないで生きていくことができるんだと言うことができます。人間というのは自覚的存在ですので、人間とは目覚めたる命・宇宙であると言えます。目覚めという自覚を持って生きるということに人間としての本物性があるんだと。**

**こういう話になって一番根本的に大事なことは、我々の命の中には、命をつくった母なる宇宙の思い・願い・祈り・意志が存在するんだという自覚を持って生きることが、目覚めたる命・宇宙として生きる…そういう生き方になるんだということを忘れないで覚えておいてもらいたいと思います。これは哲学的に人生を考え、哲学的に命を考えた場合に出てくる根本的な自覚とも言えますので、すべての人が人間として生きる生き方の基本として忘れないでおいてもらいたい。そういう自覚があることによってだんだんと人間としての本物性、本物としての生き方がつくられていくということになってくる。具体的に我々の命の中には、どういう内容が込められているのか。どういうことに目覚めれば、我々は母なる宇宙の祈りに応える生き方をする本物の人間になれるのか。そのことを考えていかなければなりません。**

**そのことを考える道筋として、我々は一体どういう風にして動物から独立をして人間という独特の生き方をするようになったのか。この歴史的事実を振り返ることが大切。事実の中には人間が母なる宇宙から与えられた人間としての生き方がだんだんと顕現してくる、命の中にあるものがだんだんと出てきて、それによって我々は人間としての生き方をすることができるようになっていった…というのが人類史の内容なんですね。哲学では、人類史とは人間性の自覚史であるという言い方をするんですね。人類の歴史は人間とは一体なんなのかということをちゃんと形にして見せる、それが人類史だと。人類史そのものが人間とはなんなのかを知る内容を形成している。これまでに少しずつ形作られてきました歴史を見れば、人間の命の中にどういう内容が込められているかがわかる。命の中にあるものが出てきて、具体的に自己実現という命の歴史、人生の歩みということを我々はしていきますので、無いものは出てきようがない。出てくるのはすべて命の中にあるもの。そういう理解の仕方をすることができます。人類史を遡って見ていけば、人間はどういう内容を命に与えられているのか、母なる宇宙によって与えられている人間としての生き方の具体的な内容が、人類史を辿ることによって見えてくる。**

**そういったことを踏まえて、どのようにして人間は動物から脱却して人間独特の生き方をすることになったのか。その経緯を考えてみると、どういったことがわかるか。現在の人類史についての考え方は、人類考古学と文化人類学の共同研究でだんだんとわかってきたことなんですけど、人間は他の動物と生存競争をして生きていた時代は、旧人の時代。そこから、他の動物を支配しながら生きるという人間独特の生き方をし始めたのは、約20万年前からだと言われています。そこから人類は旧人の段階を脱して、新人と言われる新しい次元の在り方に進化した。約20万年前に何があったのか。それを調べていくと、約20万年前よりも古い地層から出てくる人骨には、宗教的儀式をして葬った痕跡がない。だけども、約20万年前から今日に至るまでの新しい地層から出てくる人骨には、ほとんど宗教的儀式をして葬った痕跡がある。ということが、文化的人類学上で言われています。これが一体何を意味するのか。約20万年前から人類は、神や仏といった言葉はありませんが、超越的存在…人間の力をはるかに超えた存在を意識しながら生き始めた。そういう意識がなければ宗教的儀式をして死者を葬るという行為が出てこないんですよね。これが超越的存在を意識したことの証明にもなります。**

**なぜ、人間は他の動物がしていない、超越的存在を意識し始めたのか。その次元に到達したのか。約20万年前よりも古い時代には、原始的な生活をしていた。いわゆる「はじめ人間ギャートルズ」のような方々がいらっしゃった。では、どんな生活をしていたか。まだまだこの時期は地殻変動が盛んであちこちで火山が爆発していたり、地震が多発していた。うっかりしていると生活している地盤が割れてしまう。日々、何が起こるかわからないような激しい時代であった。そのような環境で生きていると、周りで起こることがなぜ起こるのかがわからないという不安と恐怖に襲われていた。であるから、なぜなんだと必死になって考えた。そのような人類が初めて頭を使って考えたことを擬人的類推と言います。あらゆることを人に置き換えて、自分たちに置き換えて考える…感情や心や考えていることのように、人になぞらえて物事を考える…そういったことをベースに理解して解釈する。少しずつ考えることが始まっていったんです。その結果、日々周りで起こることは、「俺たちがやっているんではない」と。「俺たちにはできない。もっと大きな存在がいて、それが起こしているんだ」と考えるようになっていきます。そのような存在を喜ばせるようなことをすれば、自分たちが困るようなことはやらなくなるのでは、とも考えるように。そのために踊りを踊ったり、貢物を捧げたり、自分たちが大事にしているようなものをお供えしたりすることで、超越的存在を意識した行為をし始めました。**

**お供え物をしたタイミングで火山活動が緩やかになってきたのなら、「こういうものをお供えしたら喜んで困るようなことはしなくなった」と考えてしまった。だんだんとこういうことをしたら良くなったなど、体験的に少しずつ掴みながら、意思の疎通のような関係を図っていった。これが原始宗教がつくられていった経緯なんですね。そういうことから、他の動物が考えないような神や仏、超越的存在がいて、そういうものが世界を支配しているんだという世界観を持つようになっていきました。**

**動物は目に見えるものとの関係性だけで生きているが、人間は目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る…という力を持ちました。目に見えるものは、目に見えざるものによって支配されているという世界観を持った。これが人間が動物から飛躍的に進化するということになった直接の原因であります。そのことによって人間の頭蓋骨が急速に変化して、現代人のような、新人と言われるような顔つきに肉体が激変していった。動物と生存競争する段階から、人間としての自覚を持って生きるという段階に成長し、進化したと言うことができます。**

**それらを考えると、人間が人間としての格を持って生きる最も根底にある大事なものは、目に見えるものの背後に目に見えざるものを見て生きる…目に見える現実に支配されていては動物だ。目に見えるものの背後に目に見えざるものを見て生きることこそ、人間が人間らしく生きる原点であります。**

**では、目に見えるものの背後に目に見えざるものを見るというのは、どういうことなのか。それは、背後に未来を意識する、あるいは意味を見出す、希望・目標を持つ…これらが目に見えるものの背後に目に見えざるものを見ることによって、できることになります。また、過去を意識しながら生きる。または理念とか理想、法則、本質ということを追求して現実を生きる。これも目に見えるものの背後に目に見えざるものを見ること。人間と動物の生き方の大きな違いは、動物は与えられた現実に適応するか、人間は与えられたものをどう素晴らしいものに変えていくか、これが基本となっています。またこれを推進していくのも人間的と言えます。その結果として歴史をつくり、文明をつくり、文化をつくって今日に至っています。そういう意味で我々は現実においても、与えられたものをより素晴らしいものに変えていくという生き方をしなければならないと言えます。より素晴らしい人間関係をつくっていく、より素晴らしい生き方で生きていく、求めていく、より素晴らしい仕事をしていく。とにかくいろんなことにおいて、より素晴らしいと言えるものを求めてつくっていくということに、人間らしいという生き方が生まれてきます。理想を持つことによって現実を理想に近づけていく、変化をつくり出すという生き方ができてきます。**

**とにかく、人間が動物とは違う生き方をするようになった出発点に原始宗教が関わっているということです。原始宗教によって目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る力を得た。その力を持つことによって、抽象概念である言葉をつくり出した。**

**ここでも逆算していくと言葉→抽象概念→原始宗教→超越的存在=抽象概念ということになります。「目に見えないけど何かがある」と人類は確信し始めた。このことによって、目に見えるものの背後に目に見えざるものの存在を考え、つくり出すという力を持った。目に見えるものの背後に目に見えざるものがいて、目に見えざるものによって現実は支配されていると考えたわけです。**

**そのことによって、梅の木、松の木、桜の木をひっくるめて「木」という抽象概念を持つようになった。なぜできたかというと、目に見えるものの背後に目に見えざるものを意識したからです。目に見えるものをひとつにまとめたわけです。→これが言葉をつくった順序になります。そういった成長の仕方、進化の仕方を果たしていきました。**

**原始宗教が人類にどのような影響、力を与えたのかを知るのも非常に重要であります。人間的な文化や歴史の出発点でもありますから。**

**しかし、まだ目に見える現実に支配されて、目に見える現実の背後に目に見えざるものを見る・意識するということを人間らしい生き方を忘れてしまっている。目の前のあらゆることに振り回されている。本来の理念から外れて、偽物に堕落してしまっている…そういう姿が非常に多い。**

**今日の日本、世界の政治を見ても、ほとんどの各国の指導者は目の前の問題に気を取られていて、人類はこれからどういう世界をつくらなければいけないのか、どういう日本をつくらなければいけないのかを考えられず、100年先の未来を見据えて行動できていません。理想に向かって現実を動かしていくという生き方を忘れてしまっている。残念ながら今の世界・日本には理想・夢は無い。政治家は国民に対して夢を持たせることができていない。そういう意味では、今の人類の生き方は、目の前の問題に振り回されて理想を見失っている非人間的な生き方、人間的にはあまり価値がない生き方をしてしまって、人類は苦しんでいるとも言えます。**

**歴史を振り返ることによって、人間はどういう目標を持って生きていけば、人間として本物と言えるか。あるいはお客様から信頼されるプロになれるか、人間の格をどうすれば自分のものにすることができるか、具体的に考えていく道に入る必要があります。人間に成るとはどういうことなのか、人間であるとはどうあることなのか、そういう問いを持って、さらに答えを与えていくという生き方を実践的にやっていかなければなりません。歴史を振り返ることによって人間が今日までに獲得してきた、あるいは自覚化してきた、母なる宇宙によって与えられた人間の格とは一体なんなのか、ということがわかってくるわけです。**

**まずは、人間は母なる宇宙の導きによって原始宗教を持つことによって目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る、それを意識することができるようになった。人類は母なる宇宙の存在を意識して、自覚して生きるという段階に進化することができた。その結果として、具体的に人間の格はなんなのか、人間が人間らしい生き方をするためにどういう内容、人間性を持たなければならないのかということがわかってくるわけです。目に見えるものの背後に目に見えざるものがいるということが意識されるようになっていった。結果、超越的存在がいる。そして、自分たちは超越的存在ではない、ということ。神や仏という超越的存在は、この世を支配している完璧・完全・絶対なる存在だということ。我々は完全ではない、不完全であると。そういうことが人間にだんだんと出てくるわけですね。超越的存在を意識することによって、ようやく我々は人間とはなんなのかを自覚化することができるようになった。それによって人間になり始めるわけです。ここから人間に成るという道ができていくわけです。我々は絶対的存在ではない、完全な存在ではない、だから人間は不完全だ。有限である、という意識が生まれてくる。これが人間が人間とはなんなのかということを初めて知ることになった出発点であります。**

**我々人間がまず初めに持たなければならないものは、不完全性の自覚である。これが、宗教という文化を持つことになって生まれてきた人間性に対する最初の目覚めなんです。ここから、動物ではなく人間として成長していく流れに入ります。人間はあらゆる意味において不完全だと、ちゃんと自覚して生きることが人間に求められる本物の人間における第一原理である。本物の人間と表現する内容は三つあります。**

**第一番目が、不完全性の自覚。この意識を持つことによって人類は人格を持った人間としての生き方を始めることになったわけです。なぜこれが大事になるか。不完全性の自覚は、人間にしか持てないものであるから。神にも動物にも持てない。人間だけが持てるもの。つまり、人間にしか持てないものを持たずして人間と言えるか、そういう根拠が成り立つわけです。仮に神が自覚を持つならば、完全性の自覚のはず。動物は人間同様不完全な生き物ではあるが、神や仏のような完全なものを意識する能力を持っていない。完全ではないという意識をつくり出すことができない。不完全ながら完全なものを意識できる人間だけが、「俺は完全ではない」という意識・自覚をつくり出すことができる。**

**不完全性の自覚は、人間である証明として大事な自覚ではあるが、まだ知識レベル。しかし、人格は単なる知識ではない。人格は、命に根ざして、命に染み込んで、肉化して体得されて、命から湧いてくることができて、初めて本物になった・身についたと言えます。結果、湧いてくるものは謙虚さです。謙虚さが出て初めて本物の人間に成ったと言えるんです。単に自分は不完全だと知っているだけでは、まだ本物ではなく偽物であると。うっかりすると不完全性を忘れてしまっていて、謙虚さが出てこない。**

**よく経験することですが、相手が客だとわかったら相手に親切にして謙虚になるのですが、相手が客じゃないとわかったら一瞬にして傲慢になってしまう。失礼な態度や物言いをしてしまう。状況によって変わるのは、まだ身についていない証拠で、偽物のまま。いついかなる場合でも謙虚さを持ち、謙虚な眼差し・物言い・態度を感じられる…そうなって初めて人間は本物であると言える。本当に人間の格が身についたと言えるんです。そのことを実はお客様は見ている。場合によって傲慢さが出ているようでは、ついには信頼を無くしかねない。いついかなる場合でも謙虚さを持ち、謙虚な眼差し・物言い・態度を心がけ、湧き出てくるようにする必要があります。滲み出てきて初めて本物ですからね。まだ不完全であるとか謙虚さを意識しながらやっている分には偽物です。滲み出るまで自分を鍛えていく、そうでなければ本物に近づけない、なれない。**

**では具体的に謙虚さが滲み出てくるにはどうしたら良いか。本物の人間になるためにはどうすれば良いか。そのための方法論が二つあります。不完全性の自覚が身について、肉化して、謙虚さが滲み出てくるという状態にするにはどうすべきか。**

**一つは、人間は誰しも長所半分短所半分であるということ。長所も短所もなくならない。こういった人間性の理解を深めると決して傲慢にはならない。謙虚になるしかない。どんな立派な人間でも長く付き合えば、他人から避難され、嫌がられ、軽蔑される部分が半分はあるんだ。そうでなきゃ人間ではない。人間はそういうものだと理解する。**

**なぜ、人間性は長所半分短所半分なのか。我々人間は大宇宙の一部分なのだということ。では宇宙とはなんなのか。プラスとマイナスのエネルギーがバランスを模索しながら秩序をつくっているのが、宇宙の摂理である。高校の物理の教科書には、宇宙とはエネルギーバランスだと書かれています。つまり、+-が半分ずつある…この構造を理解し、あらゆるものが半分ずつであると考えれば、宇宙の中に存在するものは皆、バランス・平衡・調和作用が働いていると言えます。バランスを模索しながら存在し、生きている。なぜ星が丸くなろうとするのかというと、三次元の空間の中で存在するものが完全なバランスを追求していくと、球体になっていきます。だから、星は皆、丸いのです。**

**バランスを追求するということは、相反する二つが調和を取り合うということ。宇宙には基本的にプラスがあればマイナスがある。陰には陽がある。光には影がある。表には裏がある。すべて半分ずつ。真には偽、善には悪、男には女、動物には植物。宇宙の摂理によってつくられるものは、すべて相反するものが半分ずつ存在する。人間の命は人間がつくったものではなくて、宇宙の摂理によってつくられたもの。**

**ですから、人間には長所半分短所半分ということになるのです。当然であって、宿命であって、そうでなきゃおかしいとも言えます。そういう意識を我々は持っていないといけません。どんな人にも長く付き合えば嫌だと思う部分が出てきます。そのことを理解していないと人間を人間として愛せない、人間と長く付き合うこともできません。どれだけ好き好きで結婚しても長く付き合っていれば、自分から見て嫌だと感じられる部分が半分は出てきます。それを覚悟していないと夫婦関係なんて続くはずもありません。短所は半分あってなくならない。短所があるからこそ、人間が人間らしく存在できて、謙虚な気持ちを持つことができる。短所がなくては謙虚でいる根拠がなくなってしまう。長所ばかりなら傲慢になってしまう。だから、人間は短所をなくそうとする努力をしてはならない。なくす努力よりも自分の短所はなんなのかを知って謙虚になる…そういう自分をつくっていかないと人間らしい血の通ったやさしい生き方ができる人間にはなれません。**

**自分にも短所があるんだと知っていると、人の短所も許せるんですよ。自分の短所を否定する人間は人の短所も責めますよ。だから、皆に嫌われます。その人を愛するということは、その人の短所も長所も愛するということ。短所も長所も許せて、認めて、初めてその人を愛することができるんです。長所は愛せても短所は愛せないという人は、その人を愛せない。そうでなければ人間関係は長続きしない。不幸な人生を歩みたくなければ、本物の人間として長所も短所も認めて許して愛することができる…それが本物の人間である。**

**長所も短所も愛せて愛は芸術となる。恋は自然と出てくるものですからね。愛は人間が努力してつくっていく文化ですから。人の短所を愛せない人間は醜い人間です。とにかく人間が人間として本物の生き方をしようと思ったら長所も短所も愛せる自分をつくっていかなければならない。人間には短所も必要。短所があって初めて人間らしくなれる。**

**長所を伸ばして他人の役に立つような人間にならないといけない。決していばるためではない、人を助けるためである。短所をなくす努力をしてはならない。そんな時間があれば、長所をとことん伸ばす努力に充てるべき。長所が他人から一目置かれるようになると、短所は努力せずとも人間の味となる。人間味になる。短所を指摘される場合は、まだまだ長所が伸びていないから。「あんなすごい力を持っているのにこんなところがあるんだ」と。「人間として親しみを感じる、面白い」となる。長所が伸びれば短所は人間味になる。そうならないと、長所を伸ばす意味がない。**

**長所が伸びれば短所は人間味になることを“角熟”と言います。普通であれば円熟と言って真ん丸の円になることを求めますが、円熟はありえない。真ん丸にはなれない。角熟というのは、短所もあり、不得手もあり、失敗もし罪も犯す…しかし、それが不完全な人間の偽らざる姿である。人間には皆、個性がある。あちこちデコボコと角ばったまま熟していく。デコボコのまま、そのまんま東になる・さんまのまんまで熟していくと、角熟となる。丸くはなるな、尖って生きろ。それは喧嘩をするんじゃない、衝突することではない。個性を伸ばして長所も短所も磨いて、そして人の役に立つ生き方をすることである。円熟は個性がない、角ばったまま熟していき、個性ある輝きを持って人の役に立つ人間になる。**

**しかし、短所が出てきたら嫌われてしまいますから、出てこないように注意をする必要がある。そのためには、「君の短所はここだ。でも、それが出ると嫌われるから注意をしよう」と助言をすることも大事になる。けれども、「短所をなくせ」とは言うべきではない。自分の短所を知ることが何よりも大事。短所が出てしまった場合は、すぐに謝る。**

**短所を活かす最も大事なやり方は、むしろさらけ出すこと。「これが苦手だから、助けてくれ」と。助けてくれた人を尊敬し、褒め称えて感謝して恩を感じる。これを活人力と言う。人の存在を輝かせるには、自分の短所をさらけ出すこと。自分の長所で人を助けてあげているだけでは、人を惨めにする。本物の人間の生き方をしようと思ったら、人を助けてあげることも大切だが、人に助けられることも大切なんだ。それぞれ同等の価値がある。助けてくれた人を尊敬し、褒め称えて感謝して恩を感じる…これも人間として素晴らしい生き方なんだ。**

**地位が上がれば上がるほど、部下が増えてくる。それに応じて仕事をさせなければならない。皆に仕事をしてもらおうと思ったら、上司は自分の短所をさらけ出して、代わりに得意な者に仕事をさせることが大切。そして、助けてくれた人を褒め称えて感謝する。仕事を任された部下も評価してもらえたと上司に感謝する。自分の短所をさらけ出す勇気が部下を育てる。これを忘れてはいけません。ついつい上司になると部下が頼りなく見えて叱ったり注意をしがちですが、それでは部下がやる気をなくしてしまう。短所をさらけ出して部下に助けてもらう。そうすれば、部下の能力も上がるし、上司も尊敬される。これが感性の時代のリーダーシップなんですね。理性の時代はどうしても熟練者が未熟練者を叱る、注意することが多かった。それでは今の人はなかなか付いてこない。その人の持っている長所で仕事をさせてあげ、力を伸ばしてあげる。地位がを上がれば上がるほど短所をさらけ出す、その勇気が必要。これが短所を活かすというリーダーシップの在り方であります。**

**例え、ホームレスの方と接する場合でも、自分より優れたところを半分は持っているはずだと考え、まだ出てきていないけど、その可能性があるんだという意識で相手を見つめなければならない。決して人を見下すような傲慢な態度で人に接してはならない。いつ何時でも謙虚な目つきや物言い、表情、態度で接しないといけない。**

**もう一つの方法論は、理性という能力に対する意識革命です。あまりにも人間は理性に対して依存し、信じすぎています。結果として理性的に傲慢な人が多い。自分の考えを相手に認めさせようとして傲慢な態度で人に接している。時に考え方が違う、対立している人に対して。同じ考えでなければ一緒にやっていけない、同じ価値観でなければやれない、同じ感じ方でなければ一緒に生活できないというように、苦しんでいる人が多い。でも、相手が自分と同じように考えてくれないと一緒にやっていけない人は、自分しか愛せない・認められない・許せない人間なんです。そんな愛でどうして子孫を残せようか、そんな愛は偽物の愛。本来愛とは、種族保存の欲求が根底にあるものです。愛とは、自分とは違う存在を認めて必要とする精神であります。**

**理性的になれば人間は誰でも考え方の違いで対立し、殺し合う。なぜなら理性は真実は一つと考えるし、矛盾を排除するし、画一性を求める。理性的になればなるほど、我々は個性を失っていく。理性というのは皆で共存する能力だから、理性的になればなるほど個性がなくなるということです。個性無限には、感性しかない。人間として成長していくためには、個性が必要で感性を原理にして生きるしかない。**

**この社会には、確実に性格の違う人が存在します。皆、同じなわけがない。感じ方、考え方、価値観、宗教、文化…それぞれ違って当然で、混在するのが社会である。それぞれと共存する能力を社会性と言います。それは社会で生きる上で絶対に必要なもの。お互いの考え方の違い、価値観の違い、性格の違いを認めあって、それを活かし合って、助け合って生きていくしかない。それが社会というもの。人間が社会的な生き物ということは、社会性がないということであり人間性がないということ。人間性がないということは人間ではないということなんですよね。宗教戦争をしているということは、「俺たちは人間ではない」と言っていることと同じなんですね。非常に恥ずかしい行為。**

**感じ方、考え方、価値観、宗教、文化…それぞれ違って当然で、混在するのが社会である。これからの人類は、それぞれと共に生きる力=社会性を持つべき。だから、理性を超えた、理屈を超えた愛の力が必要になるんです。愛とは、考え方の違う人と共に生きることであり矛盾を生きる力。同じ考え方の人と生きるなら愛は不要。でも、なぜ人生に愛が必要になるかと言ったら、感じ方、考え方、価値観、宗教、文化が違う人と共に生きるために必要になるんです。理性は矛盾を排除する、理性では考え方の違う人とは一緒に生きていけない。けれども、一緒に生きていかなければならない…そのために必要になるのが愛なんです。考え方の違う人と一緒に生きていかなければ離婚の激増は止まらない。戦争をなくす力は出てこない。そういったことを考えると、我々は理性の支配から脱しなければならない。近代人は人間の本質は理性だと言ってきて、理性的になることが目標でした。けれども今や、理性・理屈ではない、心が欲しいと多くの人が叫んでいます。心を満たす、満足させてくれるものを求めています。今の時代においては、頭の良い人よりも心遣いができる、思いやりのある人の方が立派なんだ。それが今の時代を生きるために我々が求める本物の在り方です。心遣いができる、思いやりのあることで、はじめて頭が良いことも生きてくる。心遣いがなく、思いやりもない…けれども頭が良いという場合は、かえって嫌われる。人情味がないといって人間としては尊敬されない。……時代は明らかに大きく変わってきている、理性から心へと。そういう意味では我々は早く理性の奴隷から解放されて、理性という能力を人間が幸せに生きることに使うようにしなければならない。人間が理性を支配して生きなければならない。さらに理性を手段能力に使っていく。そうしなければ、これからの時代は生きていけない。**

**どうしたら我々は理性の支配から脱することができるのか。これまでは理性は完全だ、人間は不完全だ、だから不完全な人間は完全な理性に従わなければならない…とされてきました。それがゆえに人類は理性の奴隷となって人間性は破壊されました。それにより、考え方の違う人と一緒に生きていけなくなってしまった。けれども本当はどんな人とも生きていかなければならない。そのために人間に求められていることは理性の限界を知るということ。**

**これまで人類は理性を原理に生きてきた結果、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊（離婚の激増、幼児への虐待など）が起きた。ここに我々は理性を原理にして生きていって良いのかという反省と疑問が出てきている。ようやく人類は理性の限界に気付き始めた、盲信から目覚め始めてきた。絶対的信頼が揺らぎ始めてきていると言えます。この状況において我々はどのように理性を扱っていくか。理性という能力は、合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力なんだと。だから、決して理性に支配されてはならない。人間が理性を支配しなければならない。理性は人間が持っている能力の一つに過ぎないと。能力として理性を使っていかないといけない。では、具体的にそれはどういうことなのか。**

**理性で考えることはすべて偏見であると。人間というのは今肉体がある場所からしか判断できない。正しいが、歪み・偏りがある。すなわち、偏見である。その人の立場から見ればそう見えるのは当然、その偏見を乗り越えていかないと、これからの個性の時代を仲良く皆で生きていけない。どうすれば偏見を乗り越えていけるか。自分の考えは、どんな立派な考えでもすべて偏見だと考えること。違った考えを探し出してきて、それぞれを統合して最終的には結論を出すという、そういう生き方を覚えていかなければならない。これをアジアの知恵、「三人寄れば文殊の知恵」と言いますが、一人りならただの偏見、三つの意見を統合すれば真実に近づけるという考え。これを謙虚な理性の使い方と言います。人間は不完全だから完全はないけど、より真実に近づくことができる。生きた現実に肉薄しようと思ったら、一人称二人称三人称とあるから、三つの考えを統合することも当然と言えます。理性というものの不完全さを意識して、理性的にも謙虚になれるという自分をつくっていくことも大事です。これが謙虚さが滲み出てくる自分をつくるというための方法で、不完全性の自覚が本物になっていけば謙虚さが滲み出てくる人間になれるということです。**

**この方法論二つ（人間は誰しも長所半分短所半分／理性という能力に対する意識革命）を参考にしてもらいたいと思います。**

**それでは、今日の後半の話に入りたいと思います。先ほどは本物の人間になるための原理、不完全性の自覚から滲み出る謙虚さの大切さをお話ししてきました。謙虚なだけでは弱さになってしまう可能性があるし、やりすぎると媚びへつらうことにもなってしまう。しかし、土台・根底に必ず必要なものではあります。自信をつくるということも非常に大事な人生の原理になってきます。自信と謙虚さが一対となって初めて現実を生きる力となるんですね。どちらか一方だけではいけません。自信をつくるために何が必要になってくるのか。先ほど話した不完全性の自覚のおさらいですが、これは完全なるものを意識できないと「自分は完全ではない」という気持ちは出てきませんよね。ですから、不完全性の自覚の背景には、完全なるものの意識があるんです。これが次の本物の人間をつくる原理に関係してきます。人間とは、不完全でありながら、完全なものを思い描くことができる存在でもあるんです。ですから誰でも、不完全でありながら完全を求め、不完全でありながら完璧を求めて仕事をするんです。しかし、決して完全・完璧にはなり難いという限界もあります。この状況を“より以上を目指して生きる”と言います。これが、全部で三つあるうちの二番目となります。**

**すなわち、今自分が持っている力の限界への挑戦。今、不可能なものを可能にしていく。できないことをできるようにしていく。わからないことをわかるようにしていく。これも本物と言われる人間が必ず持っていなければならない大事な生き方であります。なぜ二番目の条件なのか。“より以上を目指して生きる”というのも、人間にしかできないことなんですね。神にも動物にもできない。神はすでに完全であり絶対ですからね。より以上を求める必要が無い。神は可愛想なんですけど、完全かつ絶対という領域に固定されてしまって、上にも下にも行けない、縛られた存在。動物は完全なるものを意識できない。より以上を目指して生きるという考えは生まれてきません。逆に動物は不完全という領域に固定された縛られた存在である。人間だけが、不完全でありながらも完全なるものを求められる。そういう生き方ができる唯一の存在である。人間が人間としての本物の生き方をしようと思ったら、常に“より以上を目指して生きる”ことをする必要があります。それを見失ったとき、その人は人間としての在り方をやめ、動物に成り下がったと言うことができます。**

**実際問題人間は、いろんな欲求を持って生きています。つまり、“より以上を目指して生きる”ということの現れですから。命から湧いてくる力=欲求ですので、そのように言うことができます。幸福欲、認識欲…などもっともっとということは、人間として自然な姿であります。不完全でありながらも完全なるものを求める生き方をしなければならない。ですが、決して完全・完璧になれると思ってはいけないのです。目指すけども、必ずどこかになり難いところがある。それを見失ってしまっては傲慢になってしまう。ですから、どんなに完璧な仕事をしたと思っても、どこかに落ち度があるかもしれないという危惧を持って、謙虚に結果に対処しなければならない。誰かに問題点を指摘されたときには、意地を張って逆らわず素直に忠告・批判を受け入れて、誠実に対処する。その謙虚さを失っては、本当の人間としての在り方を自覚しているとは言えず、偽物になってしまう。それをすることが人間にとって大事な成長の仕方であります。そういうことを心掛けながら、我々は少しでもより良い状態を目指して努力をすることが必要です。そのために限界への挑戦、不可能を可能にする…そういう成長する原理を忘れてはなりません。**

**具体的には、理想、目標、意味などを未来に設定しないと“より以上を目指して生きる”という生き方は出てこない。そうしなければ、具体的な行動は出てきません。理性で考えてしまいやすいのですが、理性でつくった計画というのは残念ながら人間を苦しめる、縛る。実践しようとした瞬間からその計画に縛られて、辛い苦しい人生が始まってしまう。本当に楽しい生きがいのある人生を生きようと思ったら、未来=理想、目標、意味を頭で考えずに欲求として持つことが大事になります。どういう未来をつくりたいのか、どうなりたいのか、どうしたいのか、「～たい」という欲求を持って生きることで初めて我々は、楽しい、愉快だ生き甲斐のある、自由な人生を生きていくことができる。欲求としての理想・目標・意味を持つことが大事な原理です。理性で計画をつくって自分を苦しめているようでは偽物。本当の命の充実感、喜びはない。**

**では、それを行うためにはどうすべきか。それには三つの問いかけがあって、自分自身に対してどんな人間になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来はどんな生活がしたいのかを問うんです。**

**どんな人間になりたいのか→人間というのは抽象的な存在で男女から成り立っています。男ならどんな男になりたいのか、どんな経営者になりたいのか、どんな営業マンになりたいのか、そういうことを自分に問います。そして、命から欲求を呼び覚ます。出てきた欲求に対してそうなれるようにするのが、幸せで喜びのある生き甲斐のある人生を生きていくための力になる。理想も夢も目標も、欲求として持たなければ実現できない。欲求とは行動力、欲求がなくなったら人間は行動を止めてしまう。欲求が湧き続けてくる限り、人間は行動を止めない。欲求としての意味を持たないと、我々は喜びや生き甲斐を感じ、人生を命を燃やしながら生きることができない。命が燃えるのも欲求が湧いてくるから。欲求を湧き立たせて、燃えて生きるために自分に問いかけなければならない。自分のなりたい人間像を命から引きずり出してきて、欲求を湧き立たたせながら理想を追求することで、初めて命は燃える。燃えて生きるという人生が始まるわけですね。自分の得意とする分野で自分らしい仕事をして成果を挙げることができるように働きかけていく必要があると言えます。**

**これからの時代は個性の時代ですから、「このことに関しては〇〇」と言われるような独特の才能を各自、主体的に磨いていく努力をしなければならない。これは会社から要求される仕事とは別に、言われることをやっているのではなく、自分自身の存在感をつくっていくために独自に勉強して、努力し、自分の仕事のなかで活かしていくような人生のつくり方を考えていかなければなりません。自分の存在感をつくっていくというのは大事なことで、そして、自分は本当に何がしたいのかを考えて、それができるような力を身につけ、会社に認めさせて、したいことをする人生を歩んでいきましょう。とにかく、欲求がないと人生に喜びが生まれてこない。**

**どうしたら命から欲求を引きずり出すことができるのか。命を燃やして自分らしく生きて仕事をしていくための大事なやり方になります。将来はどんな生活をしたいのか。良い家に住んでリッチな生活がしたい、あるいは田舎の家で畑を耕して自給自足の生活をしたいのか。いろんな望みがあるとは思いますが、そのために今何をやるか。それによって今の生き方が決まってきます。理想・夢は先のことに考えがちですが、今を生きる力になるんです。理想・夢・目標と言えども、今を生きている人間が考えているので現実の只中にあると考えられます。理想・夢・目標がなくなれば、今の辛さに押しつぶされてしまう…。理想・夢・目標は必ずしも実現できなくてもいい、それらがあることで今を鮮烈に命を燃やして生きることができる。それだけで価値がある。それで十分なんだ。一瞬一瞬が充実し、一瞬一瞬に喜びがある。いつ死んでも構わないというだけの生き方になってきます。“より以上を目指して生きる”という人間にしかできない生き方をするために我々は、理想・夢・目標を持たなければならない。そうすることで、努力をすることができる。学校になんか行かなくても自分を成長させることができる。理性を成長させるのは欲求。欲求があれば知恵が湧いてくる、自然に頭が良くなってくる。欲求がないと頭は良くなりません。学校に行ったら欲求に関係なく勝手に理性を磨いてくれる…勝手に頭が良くなった気がしてしまう。そんな理性は本当の生きる力ではない。学校では命と切り離した理性の使い方を学びます。ですので、現実の生活や仕事においては、そんな理性は役に立たない。仕事をしながら「どうしたら良いのか」と考えて、努力してできてくる理性が本当の実力のある、生きる力としての理性と言えます。**

**人間としてもっと成長したい、もっと磨いていきたいという人間としての成長意欲というものは、人間が人間として本物になるためには持っていなければならいもの。死ぬまで人間としてもっと成長したいという意欲を持っている必要があります。成長意欲をなくしたとき、人間としては偽物となってしまう。成長意欲をなくすと途端に傲慢さがでてきて、今の自分を認めてくれない人間に対して反感を感じるという、ちっぽけな生き方になってしまいます。成長意欲を持ち続けている限り、常に自分自身の現状を打破していくという気持ちが芽生えますので、傲慢にはならないし、人を批判したり、比較してどうこうという相対的な評価を気にしなくなる。とにかく自分が一歩一歩成長していくことが楽しみだという絶対評価の生き方になっていく。そのために我々は、“より以上を目指して生きる”という生き方の第二番目の原理である、人間としてもっともっと成長したい気持ちを持ち続ける必要がある。**

**では、人間として成長するとはどういうことなのか。能力の成長と人間性の成長と両方あります。能力を成長させようと思ったら、限界への挑戦、不可能を可能にするという生き方を貫いていかなければならない。今自分が持っている力でなんともならんという状況に陥り、万策が尽きたと諦めたら、成長はできません。でも、今自分が持っている力でなんともならんという問題や場面に出くわしたら、だけどなんとかしないといけない・したいと頑張っていると、命の中に潜在する力が湧いてきて、今ぶつかっている問題を乗り越えさせてくれる。そういった新しい力が出てくるわけです。これを潜在能力の湧出と言います。人間にはこの素晴らしい潜在能力があるだけではありません。その前に潜在能力とはなんなのか。これは遺伝子なんです。遺伝子とは能力が物質化したもので、遺伝子は生まれながらに持っているものでもあります。そして、いろんな場面で出てくることを潜在能力の顕現と言います。さらに、もっとすごい能力が人間にはあるんです。我々が真剣になって必死になって命を燃やして生きたら、宇宙のエネルギーが命を通して湧いてきます。これも持つことができます。いわゆる火事場の馬鹿力。これにより、個の限界を超えた大仕事を成し遂げることができるのです。潜在能力が出てくる分には、自分の命に生まれながらに与えられている力ですので、まだまだ自分の命の限界内の力。人間の命には生かそうとする力が作用します。どんな状況でも生かそうとする力=自分の力以外の力=宇宙の摂理の力が命の中に働いていて、それが命を生かし続ける。そのおかげで寝ていても死なないのです。これが、宇宙のエネルギーが命を支えているという証明なんですよ。本当に我々が真剣になって必死になって命を燃やして生きていると、宇宙の摂理の力が目覚めてきます。そうしたら我々は自分の命を個の限界を超えたレベルに引き上げることができる。**

**ここでも出ますが、火事場の馬鹿力。とても一人では持てないような荷物、家具を持ち出したりという話があちこちで聞かれます。できないことができてしまう力が命から湧いてくる。多くの経営者が個の限界を超えた大事業を成し遂げています。これが宇宙と繋がった命のすごさ。理性能力→潜在能力→宇宙の摂理の力。これらが人間には内在している。これはすべての人間にある力です。本当に我々が真剣になって必死になって命を燃やして生きていると、誰でも宇宙と繋がれる。宇宙のエネルギーが自分を突き動かしてくれる。宇宙がなんとかしてあげたいという思いで自分を支えて、問題を乗り越えさせてくれる。そこまでいけるのが人間と命のすごさ、素晴らしさなんですね。誰にでもあるということを信じて、我々は問題を恐れずに、苦難を悲観せずに立ち向かっていかなければならない。問題はすべて自分を成長させるために出てくるもの。問題には意味がある。苦しめるためではない。それに立ち向かうことで、能力においてどんどん成長することができる。問題は能力があれば乗り越えられるものでもない。プラス人間性の成長が欠かせません。**

**人間性という力も問題を解決するために必要になります。では、人間性の成長とはなんなのか。人間性とは、性格と人格の絡み合い。性格は自分では変えられません。気がついたときにはこういう性格になっていた。性格はなっちゃうもの。逆に人格は、生まれ持って生まれてくる人はいません。自分自身の努力によってつくられるもの。つまり人間性というのは、自然になっちゃう性格と努力してつくっていく人格の二つが統合してできあがるもの。ということは、人間性を成長させるには人格を磨くということしないといけません。**

**人格を磨くには、高さ・深さ・大きさがあります。人格の高さ・深さ・大きさを求める必要があります。だんだんと人格に魅力が生まれてきます。その魅力が人間性を成長させてくれます。同時に性格の持っているマイナス面が出てこなくなってきて、プラス面が前に出てくるようになります。性格も良くなったようになる。人格が良くなると性格も良くなって人間性も成長できる。そのような相乗効果が期待できます。このような人間性が能力と一緒になって問題を乗り越えさせてくれる力になっていきます。**

**欲求としての理想や目標、夢を持って生きることが、“より以上を目指して生きる”ということの第一原理である。第二原理は、人間としての成長意欲をなくさずに生き続けることが、本物の人間になるために必要。常に“より以上を目指して生きる”ことをするためには、ずっと問題を乗り越え続けないといけない。そうするためには、「問題は自分を成長させるために出てくるもの」ということを理解して、意味を理解することが大切になります。それから、問題が出てくることを恐れてはならない。出てこないことを願ってはならない。問題がないということは、成長できないということだと理解しないといけない。人間は不完全だから、問題がないことはない。問題がないということは、あるのに見えていないということ。これほど恐ろしいことはない。常に自分の周りには問題が在るはずだ、その問題こそ自分が成長するために欠かせないものだと考えることが大事。何をするべきかを教えてくれる存在。人生とは、問題を乗り越え続けること。仕事をするということは、問題を解決するということ。それが人生。それを我々は死ぬまで続けていかなければならない。どこかで人間は楽がしたいと思ってしまいますが、問題が無い方が良い、早くなくなって欲しいと考えがちですが、それは堕落。「易きに流れ安逸を貪る」楽がしたいだけの人生だ。**

**“より以上を目指して生きる”ということはずっと問題を乗り越え続けるということ。問題が出てくることを恐れてはならない。出てこないことを願ってはならない。問題がないということは、成長できないということだと理解しないといけない。その生き方を決して見失ってはならない。人生とは、問題を乗り越え続けること。本当にそういう人生を生き抜いていくためには、あらゆる問題や悩みには答えがある、と理解することが最終的には必要になります。この命の神秘をちゃんと掴んでいないと、へこたれてしまう。これだけ努力してなんともならないのなら、これは脈が無いと諦めてしまう。そのようにして多くの人が人生の途中で理想や夢や希望を諦めて、平凡な人生に終わってしまう人がほとんどなんですよ。あらゆる問題や悩みには答えがあるという原理を知らないから。**

**では、なぜあらゆる問題や悩みには答えがある、乗り越えられると言えるのか。今自分が持っている力でなんともならんというのが本当の問題で、今自分が持っている力でなんとかなるのは問題ではない。では、今自分が持っている力でなんともならんという問題がなぜ出てくるのか、それは自分自身をさらに成長させるために母なる宇宙が愛を持って与えてくれているということ。それが、今自分が持っている力でなんともならんという意味になります。なぜ、母なる宇宙はそんな問題を与えるのか。それはあらゆるものを成長・発展させるためには、その存在が今自分が持っている力でなんともならんという問題を与えないと、本当には成長しないから。母なる宇宙は、この地球上に生み出した命を進化させるためにどうするかと言ったら、環境の激変を与える。あらゆる生物が絶滅するレベルのもの。それすら母なる宇宙は子を愛して、子を成長させるために与える愛ゆえの試練。子はそれを乗り越え、次元の異なる成長・進化を遂げていきます。だから、ガラパゴス諸島に住んでいる多くの生物は、周りが海に囲まれているので環境が激変しない。何万年、何十万年前と同じ命の形をそのまま引きずっています。**

**ゆえに自分に降りかかる困難も成長するための試練だと思い、立ち向かうことが重要になります。そのように理解して問題に立ち向かっていけば、今自分が持っている力でなんともならない場合、命に潜在する力が湧き出て、問題を乗り越えさせてくれます。答えはすべて命から出てくる。問題と答えは一対。どんな問題も問題が出てくる前から答えは用意されている。努力をすれば、必ず答えは命から出てきてくれる。だから、うまくいくまで、成功するまでやめてはいけない。それが唯一、我々が人生を成功の人生へと導いていくための生き方の原理です。**

**信じるものは救われる…これは確かです。なぜなら、あらゆる問題や悩みには答えがある、どんな問題も問題が出てくる前から答えは用意されている、と思い続けて、問題にあたらないといけないから。信じれば答えは早く出てきて、疑うとなかなか出てこない。意識が持つ非常に不可思議な効果と言えます。「こうなるかも…」と思えばそうなってしまったり、「今日は事故を起こしそうだな」と思っていると起こしてしまったり。意識が現実を誘導するということもあります。空間は感性の海、宇宙は感性の海、皆感じあっている。信じ、思っていると、その思いは空間を伝って相手に伝わる。**

**いかなる問題が出てこようとも、我々は諦めてはならない。諦めなければ答えは出てくる。それを信じて生きる…これもやっぱり命を信じて生きる、宇宙を信じて生きるという生き方になっていき、それが目覚めたる宇宙・命としての人間の生き方と言えます。**

**これは理屈ではなく、感性の問題。自覚がどの程度深いかによって理性を超えた奇跡が起こる。そういう人生を送ることができる。理屈では考えられないことが起こると奇跡。理屈では考えられないことを起こすには、理屈を超えなくてはならない。命の素晴らしさを信じて、目覚めたる命として自分の人生を形づくっていく、そういう生き方をしていかなければならない。“より以上を目指して生きる”ということは、問題を乗り越え続けて生きるということ。仕事をするということは問題を乗り越え続けること、仕事はまさに人生の縮図。問題を乗り越え続けていくことが、本物の人間の生き方であります。**

**最後、三番目の本物の人間の条件です。**

**人間というのは社会的存在と言われますが、社会というものの中で根本に働いている原理はなんなのかと言うと、自分の価値は他人が決定するというものです。自分自身がどんなに頑張ってすごい力を持っていても、自己満足で終わること。現実の社会を生きるためには、他人から評価されなければ意味がない、一文の価値もない。であるがゆえに、基本的には我々は人の役に立つ人間になりたい、必要とされる人間になりたいという思いを持って努力し、頑張らなければならない。**

**そのために、人の役に立つことを喜びとする感性が求められます。人の役に立つことを喜びとする=愛。今後の社会を生きていくための原理は愛だと言えます。愛の実力を養っていかなければなりません。愛とは人間関係を支配する力である。愛は人間と人間を結びつける力。社会を生きるためには人間関係を処理する力が求められます。あらゆる職業は愛の実践だ。職業とは、人を幸せにすることによって、自分も幸せになる活動のこと。仕事とはなんでも人のためにやること。人に喜んでもらったら、その報酬が自分に返ってきて自分も幸せになれる。その構造が社会。自分の行った仕事もお客様に評価されて初めてお金になる。自分が幸せになろうと思ったら必ず人を犠牲にしてしまう。人を犠牲にすれば必ず自分に返ってきて自分も不幸になってしまう。これでは社会は成り立たない。人を幸せにする努力をすることによって、結果としてその努力が自分も幸せにしているということ。**

**職業とはなんなのかと感性論哲学の観点から言うと、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と、人間性を持った本物の人間をつくる・鍛える・育てるもの。会社で考えると、全社員が人に喜んでもらえるような仕事の仕方をしようとするところから職業は始まります。このことをすべての職業人は自覚しながら仕事をしなければならない。自分は、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と、人間性を持った本物の人間になるために仕事をしているんだと、思うことが大事です。これが仕事をする上で大事な理念でもあります。**

**人間が本物の人間になるためには、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性をつくっていかないと社会において本物にはなれない。仕事を通して自分自身を本物の人間に成長させていくという実践をしないと、我々は実力を持った本物の人間にはなれません。よく仕事は仕事、お金をもらう手段だと。人間性はまた別で養えば良い、座禅やら瞑想など…と考えている人もいますが、これは大間違い。確かに座禅や瞑想をしたり、論語を読んだりすることで成長は可能ですが、それは意識の成長。命の力はそれでは成長しない。命が磨かれるのは職業の現場でしかない。なぜなら、人間が本物になるためにはふたつのことが必要で、人間の真実・本質・実態に触れるということと、社会的存在であるが故に社会の真実・本質・実態に触れる…この二つが、本物の人間に鍛え上げるための条件なんです。**

**それはどういうものかと言うと、人間・社会がどんなに醜いものか恐ろしいものか素晴らしいものかという、さまざまな体験をして、初めて人間は命の根底から鍛えられる。座禅や瞑想にはそういう体験が無い。空想の世界では意識しか成長しない。命の痛みを体験する現場がなくてはならない。それが可能な場所は職業だけ。それぞれのプロとして、命をかけ、生活をかけ、人生をかけて働かなければならない。そうしてようやく我々は人間・社会の醜さに触れる。怖さに、恐ろしさ、素晴らしさに出会う。職業なしには、人間は人間と社会の本当の実態に触れることはない。また、人間と触れ合うという人間関係の場も職業が最適。命の痛みを伴う人間関係の場所。ですから、仕事を通して自分を磨いていくということを真剣に考えなければなりません。家庭でも人間関係にも活かされます。職場で鍛えられた人間性は家庭も幸せにしていきます。**

**とにかく、人間を本物の人間にする第三番目の条件は、愛。人の役に立つことを喜びとする感性が、愛。これなしにはいかなる職業も成功することはない。この気持ちが出てこないと、社会的存在として人間は本物にはならない。人の役に立つことを喜びとする感性が成長しないと、どこまでも自分本位、自己中心的、身勝手となってしまい、そういう生き方から抜け出せない。これでは家庭においても職場においても物事がうまくいきづらい。人を幸せにすることで自分が幸せになっていくという生き方をとことん追求していかないと、本当の幸せにはなれない。人を幸せにするだけではお人好しで、自分が損ばかりでは生き方が間違っている。社会というのは、自己中心性と他者中心性のバランスによって成立している。これを生き抜いていくためには、人の役に立つことで自分を幸せにしていくという道筋をつくらなければならない。その唯一の道筋が職業。職業こそが、社会の中で自他ともに幸せになっていく方法論。**

**人に喜んでもらえるからと、安売りをしていて儲からない…これでは本当の社会性=自己中心性と他者中心性のバランスというものが崩壊している。経済というのは、お互いが役に立ち合っているという関係性で成り立っています。売る方も買う方も役に立ち合う気持ちが必要。それぞれのバランスが取れて、初めて職業が成り立ちます。今の経済社会は商品先渡しでお金は後で良いという、非常に歪んだ常識になっていて、仕事を先にして報酬はいつ入ってくるかわからないという仕事もあるんですよね。2ヶ月経ってもまだ振込がない…いつ入ってくるのか不安になることもままあります。本来は物々交換から経済は始まったのですから、仕事をすればその成果に応じて報酬をもらうことが正しい在り方ですね。もちろん、会社によっては振込が先で後から仕事をするということもありますし、当日に支払いということや一週間後という今の経済常識からは一番健全な場合もあります。どうやらお客様のワガママばかりが通るような状況も多くて、歪な経済システムが常識化されております。もっともっと納得のするような形に改めていかないといけないと思いますが。**

**とにかく、仕事は人を幸せにすることで自分も幸せになれる、そういう活動。つまり、職業は愛の実践なんだ。あんまりにもお人好しになって奉仕しっぱなしで全然見返りが無い…そんな仕事をしていてはいけない。ボランティアではないのだから。異常な状況ではお互いが助け合うことも大事ですが、常識的な生活の中ではあまりお人好しになってはいけません。自己中心性と他者中心性のバランスが社会の成り立ちなんだということを忘れてはなりません。**

**本物の人間としての格を持つためには、まずは謙虚さ。その次に人間として成長したいという成長意欲、三番目に愛。この三つが人間の格をつくる、犬猫ではない人間なんだという基本原理であります。これを土台としながら、さらに人格を磨くという領域に入っていきます。それには人格の高さをつくる。高さとは高貴なる精神。人格の深さをつくる・「深いな～」と言われる人間になる。人格の大きさをつくる、「大きな人間だな」と大きさを感じさせる人間になる。そういったことがさらに人間性を磨くという課題になってくるわけであります。今日は根本の基本原理をお話ししました。どうもありがとうございました。**